

詩集 やさしい河

黒田恆一

詩集 やさしい河

黒田恆一

玄天書房

黒田恒一（くろだ こういち）

昭和24年広島県に生れる／東北大学法学部卒。
大学在学中に仙台の同人誌「ひびき」に参加。
卒業後、雑誌の編集，サラリーマン，セールスマン等の職に就くかたわら，詩作に携わる。
現職 司法書士

事務所 〒102 東京都千代田区飯田橋1-9-6
朝日飯田橋マンション404号
電話 03-262-9751

© Kouichi Kuroda, Printed in Japan, 1987

詩集 やさしい河

一九八七年二月一〇日発行

著者 黒田恒一

発行人 草野 雷

発行所 玄天書房

東京都新宿区袋町二五―三〇鶴ハイム神楽坂一〇七

電話 東京（〇三）二六七一五七三九

印刷 エム・ピー・シー・アート

定価 一〇〇〇円

目 次

やさしい河	7
水と酒	13
今朝の夢	16
鬼と魂	18
条件	21
晩夏	24
オデイオンの祝歌 ^{ほぎうた}	26
亡命のソネット	30
首切られ馬がやってきた	34
海に抱かれない	36
激しい川	38

今日の戦闘	41
戌年の男	45
一日の労働	50
一日の終り	52
幻視・平行線理論	55
撃つ	63
反受胎告知	67
ひととき	71
内海の一日	74
情景	81
あとがきにかえて	84

詩集

やさしい河

やさしい河

森すでに黒く、空なおさ青なり

ポール・デ・ジャルダン

おとといにも俺は来たさ

きつと明日にも来るだろう

だが けっして今日

この階段は昇らない

やさしい河だって

あつただろう

わらいかわせみの

屍体のような臭気の中に

きみの降りていった光の糸のもつと先に

吊りあげられたまま死んでいった魚の

まちがいもなく割れていく悲鳴

だから破片を愛撫するのはよせ もう

ひきちぎられ垂れたコードの先に

光ってみせることはないシャンデリアグラスの

飛び散った追憶のなかで激しく泳いできた道など

パタパタと羽裏きしませている黒い四枚の生き物・秋津

だが 水辺にはすべて苛酷と愛が つまり

やさしい河だって

視えているのさ

一切の悲劇のように渦巻いている

そのきしんでいる一点に

嘗て大和の中継基地 海の一族の繁栄

寺の町に血のように沈んでいる

夕陽がきらきら腐っていたのを

足のなかでゆっくり死んでいった海の乳くさい臭いから

敗走するために

光子の欠けた梯子など

誰が信頼している

信じなくとも 死のように撓んで笑いながら

誰が支えている

なめくじばかり繁栄する街で きみの指に

ピアノが一台欲しいね

だが さんと押しよせてくる

潮のような大気から

誰が

たつぷりと濡れてキュルキュルキュロキュロとよじ昇ってゆくのだ

だから足裏にべっとりと棲み込んだ

ぬめるような黴だろうか　ただの川藻

ただの死のような愛と

水葬してゆく

海に還れと

が　森に還るには記憶の堆積のちりのような迂回を

夥しい裏切りを撒水車のように門々に撒いて

ゴビの砂漠を見たいと

マンモスのように雄大な弱さで

やさしい溺死体となって

泳いでゆく

ダムというダムを

闇という闇を

死屍という死屍を

ただの水の粒子となって

くぐりぬけるセロファンのような薄膜となって

水と酒

たっぷりと

口に含んだ

水酒ウヰョウのふくらます空間は

酔いではない

まして憎悪や

焼けるような

愛情ではない

もう充分

狂っている男に

やさしい商人のような女が

門々に立ち

すれちがいざまに

声をかけてゆく

少し酔い過ぎてますね

もう充分

酔っているのに

苛酷な朝の刻が

まえぶれもなく